

## 20191025 イチョウ（イチョウ科イチョウ属）について

紅葉の季節になると赤色の葉が気になるころだが、黄葉の代表であるイチョウについて整理してみた。

1. イチョウの原産地は中国。銀杏、公孫樹、鴨脚樹とも書く。
2. 2億年前の中生代、ジュラ紀に繁栄したが、その後恐竜とともに絶滅し、現存のイチョウ科イチョウ属が唯一の生き残りといわれる。このためイチョウは生きている化石といわれる。
3. 寿命が長い木で、大木は30mにもなる。全国には樹齢800～1000年といわれる大イチョウが存在する。
4. イチョウは広葉樹でも針葉樹でもない特殊な木とされる。
5. 葉には切れ込みがあるものと、切れ込みがないものがある。切れ込みが葉の真ん中に入っているものを「ズボン型」、複数入っているものを「手のひら型」、切れ込みのないものを「扇型」と呼ぶ。
6. イチョウは雌雄異株であるが、葉の形は全く見分けるには役に立たない。雌の木のほうが雄の木に比べると2割ほど大きいようだが、メスが実をつけるためにその分のエネルギーを光合成で生産しなければならないからだと考えられる。
7. イチョウは太陽の光を多く得るために、枝の伸び方に工夫がある。あまり葉をつけない長枝とたくさん葉をつける短枝があり、長枝は光を求めて長く伸びる。伸びた長枝には長い枝をつけず、短い枝にたくさんの葉をつける。また光が十分当たる場所では枝が伸びず、短枝が形成される。枝を伸ばす必要が無いので、短枝の形成が資源の節約になる。
8. 古木では古枝の下のほうから枝のような突起をつららのように伸ばすことがある。これを乳房になぞらえて「ちち」と呼ぶ。葛城古道にある「一言主神社」の乳イチョウは有名で、樹齢1200年ともいわれる。
8. 雌花は雌株に、雄花は雄株にしかつかない。花粉の媒介は風に乗せて飛ばす風媒花である。雌花、雄花ともに春の葉の展開と同時にでてくる。
9. 枝の付き方が鋭角か鈍角かの違いで雌雄を見分ける俗説もある。枝を広げるほうが受粉しやすいので、雌株は枝を横に伸ばす傾向があるともいえる。
10. 実際は開花時期に雄花か雌花か、花を見ないと雌雄の区別はつかない。
11. 街路樹などでは、実が落ちない雄の木だけを選び、接ぎ木や挿し木をすることで、雄の木からクローンで増やしている。
12. 周囲に雄の木がなくても数キロ離れたところからでも運ばれてきた花粉で受粉し、結実（ギンナン）することもある。
13. 葉っぱや種子が通常と異なるイチョウとして次のようなものがある。
  - ①オハツキイチョウ・・・葉っぱの縁に種子が付く。
  - ②オチヨコバイチョウ・・・葉の両端がくっついてラップ状のオチヨコのような形をしている。
  - ③斑入りイチョウ・・・葉に白い筋状の斑が不規則にはいる。
  - ④ミツカドギンナン・・・タネの殻に3本の稜がある。（通常は2稜）
14. イチョウの黄葉は次のような仕組みによるものである。

光合成を停止することで、クロロフィル（葉緑素）が分解されて減ってくるので、カロチノイドで黄色が目立つようになる。イチョウはアントシアニンが作られないので黄色くなる。



一言主神社の大イチョウ



以上